

専攻科の教育

— 私特連（私立特別支援学校連合会）の専攻科 —

三愛学舎 澤谷常清

1. 専攻科

全国に知的障がい特別支援学校高等部が公・私立合わせて約 660 校ある。その中で専攻科を設置している学校は 9 校のみで、鳥取大学附属特別支援学校 1 校の他はすべて私特連加盟校である。

（表 1）に私特連学校設置順に並べ、専攻科設置年を記した。

学 校 名	創 立	専攻科設置	備 考
※1 横浜訓盲学院（横浜）	1889 年	1968 年	※ 理療科 2007 年生活科、2012 年保健理療科
旭出学園(特別支援学校)（東京）	1950 年	1979 年	29 年後 普通科に専攻科
いずみ高等支援学校（仙台）	1962 年	1969 年	7 年後 普通科に専攻科
聖坂養護学校（横浜）	1967 年	1985 年	18 年後 普通科に専攻科
光の村養護学校 土佐自然学園（高知）	1969 年	1975 年	6 年後 普通科に専攻科
特別支援学校 聖母の家学園（三重）	1971 年	1995 年	高等部設置(1987) 8 年後 普通科に専攻科
三愛学舎（岩手）	1978 年	1996 年	18 年後 普通科に専攻科
光の村養護学校 秩父自然学園（埼玉）	1986 年	2008 年	22 年後 普通科に専攻科
支援学校 若葉高等学園（群馬）	1994 年	1994 年	開校と同時 普通科に専攻科
※2 鳥取大学附属特別支援学校（鳥取）	1978 年	2006 年	公立校として初めての専攻科設置

※1：理療科の専攻科 ※2：公立校

（表 1）私特連「専攻科」設置校（2019 年度現在）

私特連校は 13 法人 14 校（2019 年現在）からなっている。表 1 の 9 校の他に、聴覚障害を対象とする日本聾話学校（東京都町田市）、明晴学園（東京都品川区）、幼・小学部の愛育養護学校、肢体不自由の障がいを主とする特別支援学校ねむの木（静岡県掛川市）、2017 年 4 月に知的障がいの生徒を対象に開校した日本体育大学附属高等支援学校（北海道網走市）がある。

知的障がい特別支援学校高等部では、1969 年に仙台のいずみ高等支援学校が最初に専攻科を設置した。学校創立から 7 年後である。若葉高等学園は学校創設と同時に専攻科を設置し、他の 7 校は学校創立から何年か経過した後に専攻科を設置している。

2000 年の初め頃、青春時代を高等部だけで終わらせることなく、もっと学びたい・もっと学ばせたいという本人や保護者の声があがり、近畿地方で専攻科づくり運動が高まった。

2004 年 11 月に「全国専攻科(特別ニーズ教育)研究会が設立され、専攻科の研究実践活動が活発に行われた。学校制度で専攻科設置が難しいのであれば社会福祉の事業の中で、という声が上がって 2008 年和歌山県の田辺市で福祉型の「学びの場」が誕生した。その後次々に「学びの作業所」「福祉型専攻科」と称して全国的に広がり、2018 年時点で 41 か所（2018, 田中良三）になり今後も増える傾向にある。

2. 専攻科の課題

知的にハンディーのある子どもたちの多くは、物事を理解し獲得するのに時間がかかる。したがって「じっくり」「ゆっくり」時間をかけて学ぶ必要がある。

青年期は「自分はどんな人間なのか」「何をやりたいのか」「どんな仕事に就きたいのか」等々、自分探しの時期である。心理学者のエリクソンはそれをアイデンティティー（自我同一性）確立の時期をよんでいる。

青年期の大きな特徴は、身体の急激な変化に伴う「性」の問題である。

身体の成長と心の成長にギャップが生じ、青年たちの多くは不安を抱く。その不安を取り除くために性教育が必要である。

身体と心の発達の特徴を理解することが大切である。科学的な視点に立ち「性」を理解することと、心の成長を意識した「生き方としての性教育」が必要である。生き方としての性教育は、人格形成に欠かせないものである。

専攻科でのねらいとして次の3点をあげる。

一つは、「自分くずし」から「自分づくり」を教育である。

青年期は、自己の内発的な力が未熟なために、18歳で社会に出るには一抹の不安を抱える者が多い。

自己の内面世界を理解するためには、仲間が大事な役割を担うことになる。

仲間との関係を通して今までの自分を振り返り、新たな自分をつくりあげる。

青年期の多感な時期に「仲間関係」を組み替える。その過程の中で今までの自分を解体し、新たな自分をつくりあげるというのである。

これが、「自分くずし」から「自分づくり」の教育である。

全国専攻科（特別ニーズ教育）研究会の会長田中良三氏は、専攻科の実践を振り返り、教師にとって大切なことは「子どもとじっくり向き合い、丁寧に寄り添うこと」であり、子どもたちは「教師に支えられ、友だちと学ぶ生活の中で、自分のこれまでの殻を破り、自分の思いを素直に表現できるようになる」と、「自分くずし」から「自分づくり」を語っている。

さらに、授業づくりのポイントとして7点あげている。

①ゆっくり、ゆったり、しなやかに！ ②自由な自己表現を大切に！ ③生活や興味・関心にもとづきゲームなど遊び感覚で！ ④いろんな人たちとの交わりのなかで！ ⑤豊かな経験を積み重ねる ⑥年齢にふさわしい誇りを育てる ⑦父母が参加し協働する

専攻科での学びが、「楽しく」「充実したなもの」でなければならない。

二つ目は、子どもから大人への移行である。

「子どもから大人へ」の移行は、人格的自立をめざす自分づくりへの移行である。

様々な体験を通して内面的な変化を捉え「喜び」「悲しみ」「緊張感」など数値では表しきれないものを感じ取り、青年の内発的意識を大切にすることである。

将来の生活を想定して「自分はどこで暮らしたいか？」「どんな仕事につきたいか？」「困ったときに誰に相談するか？」「生活に必要なお金はどれくらいか？」等、成人生活への移行を図るための自分づくりをする。

「もう子どもではない、大人になった」という意識を大切にし、名前の呼び方も「〇〇ちゃん」の愛称はやめ、「〇〇さん」と暦年齢にふさわしい呼び方や、教材や道具の準備、教育目標を掲げる場合も暦年齢を意識したものでありたい。

三つめは、学校から社会への移行である。

「学校から社会へ」の移行は、「学びの場」から「就労・社会生活の場」への移行である。

専攻科では進路選択が大きな課題となる。自分の適性を理解し進路を自分で選択できるようになることがのぞまれる。就労先を「先生が決めたから」「親が決めたから」と他人に任せるのではなく、主体的に進路選択が出来るような職業学習を展開する必要がある。

専攻科は、単に社会生活への先延ばしではない。また就労に向けての職業訓練の場でもない。自分づくりの場である。

専攻科は、〇〇の準備のための「小手先芸」を学ぶことではなく、人格形成を図ることを重視しなければならない。

じっくり時間をかけて自分探しをし、大人としての自分を形成するのである。

そして、専攻科での「学ぶ力」と「学ぶ意欲」を障がい者の生涯学習につなげていきたい。